

詩編通読

1月



(1月30日)「詩編17:6~15」

瞳のようにわたしを守り あなたの翼の陰に隠してください。

(詩編17編8節)

- ・お葬式のときに、聖歌543番「わが魂を愛するイエスよ 波はさかまき風吹きあれて」という歌を歌うことがあります。途中で3連符が何度も出てくるので、なかなかうまく歌えません。
- ・その曲の2節にこのような歌詞があります。「われにはほかの隠れ家あらず頼る方なきこの魂を ゆだねまつればみいつくしみの 翼のかげに守りたまいな。「み翼の陰に守って下さる」、それがわたしたちに対する神さまの約束です。
- ・「救い」とは、危険や困難からの緩和だけではありません。わたしたちが神さまと正しい関係になることが、本当の救いです。神さまがわたしたちを守られ、わたしたちは神さまの元にすべてを委ねる、この関係を目指していきましょう。

(1月31日)「詩編18:1~3」

主はわたしの岩、砦、逃れ場 わたしの神、大岩、避けどころ わたしの盾、救いの角、砦の塔。

(詩編18編3節)

- ・「王の感謝の歌」：王が歌った個人的感謝の歌です。ダビデの作とされるこの詩は、サムエル記下22章にも表題が同じ詩が見られます詩編18編は51節までである大変長い詩となっています。
- ・その長い詩全体のテーマと基調を、ここでは示しているようです。表題に書かれているように、この詩はダビデがサウル王に命を狙われていた状況から救われたことを、神さまに感謝しているものです。
- ・今日の箇所はその導入として、真っすぐに神さまをほめたたえています。わたしたちもお祈りの初めに、心の底から真っすぐに神さまを賛美し、神さまに感謝することができればと思います。

(1月1日)「詩編1編」

その人は流れのほとりに植えられた木。ときが巡り来れば実を結び 葉もしおれることがない。その人のすることはすべて、繁栄をもたらす。

(詩編1編3節)

- ・今年は詩編を読んでいきましょう。この中で各章の最初に書くタイトル(1編では「真の幸福」)は元々の聖書には書かれていませんが、フランシスコ会訳聖書より引用しています。また「現代聖書注解(L.J.メイズ著)」の注解も参考にしていきます。
- ・「真の幸福」：詩編第1編は、「いかに幸いなことか」から始まります。イエス様が山上の説教の冒頭で語られた「幸いなかな」(マタイ5:3)との言葉を思い起こします。ここで作者は、「主の教えを喜び」とする人を幸いだというのです。
- ・教えや戒めは、わたしたちを縛りつけることがあります。しかし神さまによって生かされることを喜ぶ人に祝福があるとしたら、その教えはわたしたちを縛る鎖ではなくなるのです。詩編は神さまの祝福からスタートします。この一年、じっくりと味わって行きましょう。

(1月 2日)「詩編 2 : 1~6」

なにゆえ、地上の王は構え、支配者は結束して 主に逆らい、主の油注がれた方に逆らうのか

(詩編 2 編 2 節)

・「王であるメシアの支配」：この詩は王詩編と呼ばれるもので、メシア（救い主）とはどういう方を指すのかということを示しています。ちなみにこの詩は、王の即位式の際にも用いられていたと考えられています。

・旧約の時代、イスラエルの王には即位のときに油が注がれました。またヘブライ語のメシア(ギリシア語ではキリスト)という言葉は、「油注がれた者」という意味を持ちます。主が油を注いだということが大切なのです。

・ところが現代もそうですが、「地上の王」である権力者は、神さまを畏れることなく歩んでいるように思います。わたしたちは誰を恐れ、誰のみ心に従って歩いていくべきか、この詩を通して考えていきたいと思います。

(1月 3日)「詩編 2 : 7~12」

主の定められたところから従ってわたしは述べよう。主はわたしに告げられた。
「お前はわたしの子 今日、わたしはお前を生んだ。」

(詩編 2 編 7 節)

・多く詩編が、日本聖公会聖歌集の歌詞に用いられています。例えば今日の箇所の一節は、聖歌集 408 番 3 節で歌われています。「世の旅ゆく、神の子よ 悪しき力、迫るとも ゆくて阻む、おそれあらじ 神と歩め、主の道に」。

・この詩編の中では、王が即位することを「お前を生んだ」と表現しているようです。そしてその後イエス様が洗礼を受けられた時に、「あなたはわたしの愛する子」と神さまは告げられます。イエス様が本当の王、救い主として、わたしたちの間に来られたのです。

・そのことを信じているから、わたしたちは「恐れ敬って、主に仕え おのきつつ、喜び躍れ (11 節)」なのです。わたしたちを愛し、導いてくださる方の声を聞き、イエス様と共に歩むことができるのです。

(1月 28日)「詩編 16 : 7~11」

わたしは絶えず主に相対しています。主は右にいまし わたしは揺らぐことがありません。

(詩編 16 編 8 節)

・ペトロは使徒言行録 2 章 25~32 節の説教の中で、この箇所 (16 : 8~10) を引用してこのように語っています。「ダビデは、イエスについてこう言っています。『わたしは、いつも目の前に主を見ていた。主がわたしの右におられるので、わたしは決して動揺しない。』

・だから、わたしの心は楽しみ、舌は喜びたてる。体も希望のうちに生きるであろう。あなたは、わたしの魂を陰府に捨てておかず、あなたの聖なる者を朽ち果てるままにしておかれない。あなたは、命に至る道をわたしに示し、御前にいるわたしを喜びで満たしてください。』

・パウロも使徒言行録 13 章 35~37 節の中で、16 : 10 を引用しています。詩編は多くの人々によって歌われ、そしてその信仰が受け継がれていったということがわかります。あなたの愛唱詩編は何編でしょうか。

(1月 29日)「詩編 17 : 1~5」

主よ、正しい訴えを聞き わたしの叫びに耳を傾け 祈りに耳を向けてください。わたしの唇に欺きはありません。

(詩編 17 編 1 節)

・「罪なき者の訴え」：主への信頼の歌です。1 節には「訴え」、「叫び」、「祈り」という言葉があります。わたしたち聖公会では、「おとなしめの」祈りが好まれているように思うことがあります。

・他教派との祈祷会に参加すると、声を大にして祈る方、「ああ」などの感嘆詞を多用される方、また一緒に祈る方も途中で「アーメン」や「ハレルヤ」と声を出す方など、いろんな方がおられます。

・この詩編の作者のように、無実の申し立てを神さまに対して堂々とするとは思えません。しかし自分の思いを涙ながらに訴え、苦しみを叫び、力の限りに祈るということが、ときには必要なのでしょう。

(1月 26日)「詩編 15 編」

金を貸しても利息を取らず 賄賂を受けて無実の人を陥れたりしない人。これらのことを守る人は とこしえに揺らぐことがないでしょう。

(詩編 15 編 5 節)

・「主の客の資格」：教訓詩編です。この詩編は神殿の中庭に入る際の礼拝式文として用いられるために、作られたのではないかと考えられています。神さまのみ前に正しい者であるかどうかを、問うのです。

・しかし 2 節から 5 節の前半に書かれている「完全な道を歩く」、「正しいことを行う」、「心に真実の言葉がある」、「舌に中傷をもたない」、「友に災いをもたらさない」などなど、すべて守れる人はいるのでしょうか。

・昨日の 14 節で「善を行う者はいない。ひとりもない」と言っておきながら、矛盾しているようにも感じます。しかしできないからと最初から諦めてしまうのではなく、何とか頑張ろうとする思いが大切なのかもしれません。

(1月 27日)「詩編 16 : 1~6」

主に申します。「あなたはわたしの主。あなたのほかにわたしの幸いはありません。」

(詩編 16 編 2 節)

・「主はわたしの受け継ぐ永遠の宝」：主への信頼の歌です。表題にある「ミクタム」というのは、「苦しめられている」という意味だそうです。したがってこれは、ダビデが苦しみの中で歌った歌だとされています。

・3 節の「この地の聖なる人々」や「尊い人々」とは、異教の神々を指しているそうです。偽りの神々や偶像にひれ伏すことなく、主なる神さまを信じ、神さまに信頼を置くという決意が歌われているのです。

・聖書における「信頼」とは、ちょっとした安心感を得ることやホッと一息つける場所にいることというのではなく、神さまに心と思いを開放するという能動的なことです。神さまのみ手にすべてを委ね、与えられた場所で歩んでいくことが大切なのです。

(1月 4日)「詩編 3 編」

主よ、立ち上がってください。わたしの神よ、お救いください。すべての敵の顎を打ち 神に逆らう者の歯を砕いてください。

(詩編 3 編 8 節)

・「迫害時の朝の祈り」：この詩は個人的な嘆願詩編に分類されます。聖書を見ると、小さい字で「賛歌。ダビデの詩。…」と表題が書かれています。ただこの詩をダビデが書いたのか、アブシャロムから逃亡しているその最中に読まれたものかなどは、様々な意見があります。

・詩編がわたしたちの心を掴む大きな要因は、このような「個人的な祈り」が多くあるところです。詩編の言葉によって、わたしたちは個人的に神さまにどう祈っていけばよいのか、示されます。

・「主よ」という呼びかけで始まり、現状について嘆きつつ、「しかし主よ」と神さまに信頼を置く。そして「恐れません」と自分の決意を述べた後、「主よ、立ち上がってください」と願う。このような祈り、できるといいですね。

(1月 5日)「詩編 4 : 1~6」

人の子らよ いつまでわたしの名誉を辱めにさらすのか むなしさを愛し、偽りを求めるのか。

(詩編 4 編 3 節)

・「夕べの信頼の祈り」：救いを求める個人的な祈りです。この詩は偽証によって傷つけられた人によって読まれています。3~6 節では特に、自分を侮辱し、苦しめた人々を叱責しています。

・わたしたちも祈りの中で、「怒り」をぶつけてしまうことがあります。自分に対する怒り、神さまに対する怒り、そして自分を貶めている人への怒り。そのような怒りにも、神さまは耳を傾けて下さいます。

・それは、「呼び求めるわたしに答えてください」、「苦難から解き放ってください」、「憐れんで、祈りを聞いてください」という切実な思いがあるからです。神さまに信頼し、思いを委ねるときに、神さまは聞いてくださるのです。

(1月 6日)「詩編4:7~9」

平和のうちに身を横たえ、わたしは眠ります。主よ、あなただけが、確かにわたしをここに住まわせてくださるのです。

(詩編4編9節)

・昨日の箇所では、傷ついた自分の姿を吐露し、怒りを表明していました。しかしこの後半部分において、彼は神さまへの信頼を前面にあらわし、眠りにつこうとしています。その背景には、希望がありました。

・聖歌471番「恵みの影に伏し憩い 愛の光に起きいでて 正しきわざを一日いそしみ タベのまどいとたのし」は、この詩編を元にして書かれています。様々な苦難が日中にあったとしても、明日への希望を胸に信仰者は平安に満たされるのです。

・この詩は、夕べの祈りとして用いられてきました。わたしたちは生きていく中で、様々な苦難にぶつかります。しかしその日の終わりにはまた、神さまへの信頼が回復されていく。それが信仰なのではないでしょうか。

(1月 7日)「詩編5:1~8」

主よ、朝ごとに、わたしの声を聞いてください。朝ごとに、わたしは御前に訴え出て あなたを仰ぎ望みます。

(詩編5編4節)

・「保護を求める朝の嘆願」：個人的嘆願の朝の祈りです。この詩編の1節には、【指揮者によって。笛に合わせて。賛歌。ダビデの詩。】と書かれています。「笛に合わせて」とあるように、詩編は歌われることが多かったようです。

・この詩編第5編も、聖歌集5番、6番、7番、15番の歌詞に使われています。15番は「くる朝ごとに」と題名を聞いただけでメロディーが自然に出てきそうな曲です。いずれの曲も、「朝の礼拝」というカテゴリーに入れられています。

・作者は朝から、どのようなことを祈っていたのでしょうか。それは「叫び」でした。詩編にはこのように、自分が置かれた状況を神さまに伝え、「何とかして欲しい」と願う嘆願の祈りが多く見られます。そのような詩編にも心を向けて、わたしたちも祈りましょう。

(1月 24日)「詩編13編」

いつまで、わたしの魂は思い煩い 日々の嘆きが心を去らないのか。いつまで、敵はわたしに向かって誇るのか。

(詩編13編3節)

・「痛みを耐えかねた人の祈り」：詩編の中で最も短い「救いを求める祈り」です。しかし短い中にありながらも、この詩は個人の嘆きの歌の典型とされています。つまりこの詩のように、わたしたちにも祈りなさいということなのです。

・「いつまで」という言葉が、この詩の前半に目立ちます。神さまに祈っても、祈っても、なかなか苦しみから抜け出せないことはよくあります。そのようなときにわたしたちは「いつまで」と、神さまに問いかけていきます。

・ともすれば、神さまを自分の思うままに操ろうとしているように感じるかもしれません。しかし作者は最後の節で、「あなたの慈しみに寄り頼みます」と書きます。「いつまで」という希望はいつの日か必ず叶い、喜び踊る日が来ることを信じて待つのです。

(1月 25日)「詩編14編」

神を知らぬ者は心に言う 「神などない」と。人々は腐敗している。忌むべき行いをする。善を行う者はいない。

(詩編14編1節)

・「神を信じない輩」：悪を前にした神に従う人々を力づける詩です。「神などない」という言葉は、無神論者を指しているものではありません。これだけ悪いことをしても、神さまは自分を裁くことなどできないだろうと考えている人たちです。

・「そんなことしたら、バチが当たるよ」、よく子どもの頃に言われていた言葉です。わたしの実家はキリスト教ではなく、神さまというのは「おてんとさま」のようなイメージでした。わたしは日々見張られているように感じ、こっそり悪いことをしていました。

・もしも神さまがすべてを裁かれるとしたら、誰一人として救いに与ることはできなくなります。パウロはローマの信徒への手紙3章13~18節でこの詩編を引用し、「正しい者は一人もいない」と書きました。神さまは裁き主ではなく、愛の方なのです。

(1月 22日)「詩編 12:1~5」

主よ、お救いください。主の慈しみに生きる人は絶え 人の子らの中から 信仰のある人は消え去りました。

(詩編 12 編 2 節)

・「悪い舌と主の清い言葉」：悪が社会にまん延する中であって、主の救いを求めた祈りです。わたしたちが今住んでいる世の中は、闇バイトによる強盗やオレオレ詐欺、消えることのない暗いニュースなど、悪がすべてを支配しているかのように思われます。

・悪は、人の唇と舌と心を使って入り込んでくると作者は書きます。言葉を巧みに用いて人を騙し、また二つの心を使い分けて近づいてくるのです。わたしたちにもそのような経験はないでしょうか。

・そのときにこそ、主のみに信頼を置き、「お救いください」とすがりつく信仰が必要なのです。「正しい人がいない」と嘆き続けるのではなく、神さまはきっと何とかしてくださるに違いないという強い思いを言葉にするのです。

(1月 23日)「詩編 12:6~9」

主に逆らう者は勝手にふるまいます 人の子らの中に 卑しむべきことがもてはやされるこのとき。

(詩編 12 編 9 節)

・昨日の箇所続きです。この世の悪を嘆く作者は、主への信頼を歌っています。「虐げに苦しむ者」は、「哀れなものすすり泣き」とも訳されます。誰にも聞こえないようなすすり泣く声にさえ、神さまは耳を傾けてくださるのです。

・また主の仰せは清く、土の炉で七たび練り清めた銀だと言います。銀は精錬されればされるほど、その純度は高くなっていきます。神さまの言葉もそのように純粋で、信頼に値するものだという意味に取れます。

・信仰者はただ神さまを信頼し、祈るのみです。その祈りを神さまは聞かれ、救いを与えられるのです。この救いとは、「安全な場所に避難させること」という意味も含むそうです。神さまがわたしたちをみ翼の陰に置いてくださる、そんなイメージでしょうか。

(1月 8日)「詩編 5:9~13」

あなたを避けどころとする者は皆、喜び祝い とこしえに喜び歌います。御名を愛する者はあなたに守られ あなたによって喜び誇ります。

(詩編 5 編 12 節)

・この詩編 5 編では、作者は偽証によって窮地に落とされているようです。旧約聖書の十戒には、「偽証してはならない」という掟が書かれています。どんな理由であれ、隣人に対して偽証することは、神さまに背くことになりません。

・その「裁き」を神さまにお委ねするというのがこの詩の内容になっていますが、わたしたちの日常の中では「真実 (真理)」が立ち位置によって変わってしまう、つまり何が正しいのか判断が難しいという事例もみられます。

・他者とのトラブルを神さまにお委ねする。人間的とも思える行為ですが、「毒麦を育つままにしておきなさい。裁きは神さまにお任せしなさい」と語られたイエス様の言葉を思い起こすと、とても大事な視点なのかもしれません。

(1月 9日)「詩編 6:1~6」

主よ、立ち帰り わたしの魂を助け出してください。あなたの慈しみにふさわしく わたしを救ってください。

(詩編 6 編 5 節)

・「憐れみを乞う病人の祈り」：カトリック教会ではこの詩を、七つの痛悔詩編の最初のものとして分類します。「痛悔」とはカトリック用語で、「心の底から悔やむこと。非常に後悔すること」を意味します。

・「主よ、癒してください」という言葉があるとおり、作者は病気からの癒しを望んでいます。ただ詩の中で主の怒りや憤りに触れているように、当時病気にかかることは、神さまからの罰だと考えられていました。

・そのため「病気を治してください」という祈りは、「わたしの罪をお赦してください」という願いに通じていました。わたしたちが病気の癒しを祈るときとは、少し違う感覚なのかもしれません。

(1月 10日)「詩編 6 : 7~11」

苦悩にわたしの目は衰えて行き わたしを苦しめる者のゆえに 老いてしまいました。
(詩編 6 編 8 節)

- ・詩編 6 編の最初に「第八調」と書かれています。これは、1 オクターブ下げて歌いなさいということです。つまり悲しみを現わすために、低い声（低音）で歌いなさいという指示だそうです。
- ・「わたしは嘆き疲れました。夜ごと涙は床に溢れ、寝床は漂うほどです」と作者は嘆きます。そして「悪を行う者よ、皆わたしを離れよ」と叫ぶのです。ただこの悪は、罪を犯す自分自身のこと（心）なのかもしれません。
- ・そして作者は、主がその声を聞き、受け入れて下さるという確信を持ちます。この確信は、わたしたちの祈りにおいても大事なものです。「神さまは必ずわたしの願いを聞いてくださる」、その思いを持ちながら、毎日祈っていきたいものです。

(1月 11日)「詩編 7 : 1~6」

わたしの神、主よ、あなたを避けどころとします。わたしを助け、追い迫る者から救ってください。

(詩編 7 編 2 節)

- ・「審判者なる主への訴え」：嘆きの詩です。新共同訳聖書 1 節の「シガヨン」という言葉は嘆きをあらわしていますが、具体的な意味は分かりません。ダビデが敵からの解放を求めて歌った詩だとされています。
- ・冒頭に「クシュのことについて」とあります。クシュという人名はサムエル記下 18 章 21 節に出てきますが、彼はベニヤミン人ではなくエチオピア人でなので別人です。ベニヤミン人として思い出されるのは、ダビデの前の王サウルです。
- ・彼はダビデを追い回し、その命を狙っていきました。その「敵」から逃れるために、ダビデは祈ります。ただし、もし自分に不正があったためにこのような事態を引き起こしたのであれば、わたしはどうなってもよいとも付け加えます。すごい祈りだと思います。

(1月 20日)「詩編 10 : 12~18」

あなたは必ず御覧になって 御手に労苦と悩みをゆだねる人を 顧みてくださいます。不運な人はあなたにすべてをおまかせします。あなたはみなしごをお助けになります。

(詩編 10 編 14 節)

- ・昨日の場面で、「神さまは隠れておられるのか」と嘆いた作者ですが、今日の詩の最後には「この地に住む人は 再び脅かされることがないでしょう」という言葉を書きます。この間には何があったのでしょうか。
- ・そこにあるのは、神さまは「貧しい人」を決して見捨てられないという確信です。「貧しい人」というのは、自分自身のことかもしれませんし、誰かを思い浮かべてのことかもしれません。
- ・ともかく詩編の作者は、神さまはご自分を一番必要としている人のところに来てくださると確信します。神さまに頼るしかない自分を感じる時に、この詩編の言葉は自分のものとなっていくのです。

(1月 21日)「詩編 11 編」

主は正しくいまし、恵みの業を愛し 御顔を心のまっすぐな人に向けてくださる。

(詩編 11 編 7 節)

- ・「義人の主に対する不動の信頼」：神さまに対する個人的な信頼の歌です。社会の道徳的秩序がおかしくなっている中で、誰に信頼を置くのかということこの詩はわたしたちにも問いかけてきます。
- ・作者が 6 節に書く「杯」とは、神さまが定めたそれぞれの人の運命のことです。イエス様がゲツセマネの園で、「できることならこの杯を取り除いてください」と祈った場面が思い起こされます。
- ・わたしたちの周りにも、不正や不法がはびこっています。その中でわたしたちは、どこに信頼を置くのか。安易に山に逃れてるのか、それとも主を避けどころとして立ち続けていくのか。わたしたちの信仰が問われているようにも思います。

(1月18日)「詩編9:16~21」

主よ、異邦の民を恐れさせ 思い知らせてください 彼らが人間にすぎない
ことを。
(詩編9編21節)

・詩編の下の方に、「[セラ] や、「[ヒガヨン・セラ]」といった言葉が書かれていることがあります。詩編は当時、歌われていたということは何度かお話ししていたと思います。そしてこれらの言葉は、どのように歌うかを指示する記号だと考えられています。

・たとえば「セラ」は、「音程を上げる」という意味があると考えられています。(諸説ありますが)。また「ヒガヨン」は、「短い間を開ける」という意味があるそうです。(これまた諸説ありますが)。

・わたしたちも礼拝の中で、チャントを用いるときがあります。その際には指揮者(司式者)や楽譜に合わせて歌っていきます。同じことがずっと詩編を用いてなされ続けていたということは、祈りがずっと引き継がれていたことを意味しているのです。

(1月19日)「詩編10:1~11」

心に思う「神はわたしをお忘れになった。御顔を隠し、永久に顧みてく
ださない」と。

(詩編10編11節)

・この10編には表題がつけられていません。そのため9編とあわせて、一つの詩だと考えられています。そう考えられるもう一つの理由は、9編・10編ともに、「アルファベットによる詩」となっていることです。

・この二つの詩は、すべての詩行の第二行の最初の字が、ヘブライ語のアルファベット順に並んでいます。日本でいう「いろは歌」のようなものです。このような詩編は、教育的な意味も持っていたようです。

・ここで作者は、「主よ、なぜ遠く離れて立ち 苦難の時に隠れておられるのか」と嘆きます。神さまの愛を感じることができない、そのようなことは昔からあったようです。そしてそのことを正直に人々は語ってきました。そのような声も、神さまは待っておられます。

(1月12日)「詩編7:7~12」

主よ、諸国の民を裁いてください。主よ、裁きを行って宣言してください お前は正しい、とがめるところはないと。
(詩編7編9節)

・詩編にはしばしば、「避けどころ」という言葉が出てきます。不安と恐れの中にあっても、神さまに自分を委ねることで、わたしたちの魂はその「避けどころ」に避難することができるのだと思います。

・今日の詩には「避けどころ」という直接的な言葉は出てきません。しかしダビデが敵から逃れるために、神さまを自分の盾とし、神さまの正しさにすべてを委ねていることがわかります。

・わたしたちの祈りの中でも、「み心のままに」という言葉は大切です。今すぐにでも敵対する人に裁きを与えて欲しい、そのような思いがあったとしても、最後は神さまにお任せする。どんなに自分が正しいと思っても、それは自分の尺度でしかないわけですから。

(1月13日)「詩編7:13~18」

災いが頭上に降り 不法な業が自分の頭にふりかかりますように。

(詩編7編17節)

・「自業自得」という言葉があります。また「天に向かって唾を吐くと己にかかる」という言葉もあります。悪いことをしてしまった人には天罰が降るといふことでしょうか。そのような人は、自らに対して裁きを招いているといふことになるのでしょうか。

・旧約の時代には、善いことをした人には祝福が、悪いことをした人には罰が与えられると考えられていたために、このような祈りは当たり前の様にされていました。では貧しいことや病気など、苦しみの中にある状況が、「悪いことをした」とは結び付くのでしょうか。

・イエス様は、「因果応報」ではないとはっきり教えられました。特につらい状況にあるときに、「あなたの普段の行動が悪いからそうなったのよ」と言われたらショックを受けます。罪ある者が災いを受けるとすれば、誰一人として逃れることはできないのです。

(1月14日)「詩編8:1~3」

天に輝くあなたの威光をたたえます 幼子、乳飲み子の口によって。あなたは刃向かう者に向かって砦を築き 報復する敵を絶ち滅ぼされます。

(詩編8編2b~3節)

- ・「創造主と人間」：詩編の中で最初に出てくる賛歌です。「ギティトに合わせて」と聖書には書かれています。「ギティト」とはぶどうを搾るための酒舟のことです。杜氏の人たちが酒造りのときに歌うようなものなのでしょう。
- ・多くの詩編は、日常の中でも唱えられていたようです。様々な場面で、神さまに賛美をささげる。それがユダヤでは日常的におこなわれていたのです。わたしたちは日ごろ、神さまへの賛歌をささげているのでしょうか。
- ・様々な働きをしている中で、神さまをほめたたえる。礼拝だけではなく料理をしていたり、車に乗っていたりするときなど、ふとしたときに神さまを思い、祈る。そのような毎日を過ごせるといいですね。

(1月15日)「詩編8:4~10」

そのあなたが御心に留めてくださるとは 人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう あなたが顧みてくださるとは。

(詩編8編5節)

- ・「すみわたる大空に 星影はひかり 風そよぐ野に山に 草花はかおる 数しれぬ空の星 神さまはみな数え ひとつずつ目をとめて 守られるいつも」、聖歌350番の1節です。この詩は詩編8編を元に書かれています。
- ・創世記1章には、天地創造の場面が描かれています。神さまは天体や植物、鳥や魚、動物もすべて造られました。そしてわたしたち人間を造り、すべてのものを治めるように命じられました。
- ・わたしたちはその自然の中に生かされていることを、日々感謝したいと思います。日常の雑踏から離れ、星や自然、風に身を任せながら神さまの息吹きを感じる。その中で、ぜひ聖歌350番を歌いましょう。

(1月16日)「詩編9:1~11」

主よ、御名を知る人はあなたに依り頼む。あなたを尋ね求める人は見捨てられることがない。

(詩編9編11節)

- ・「虐げられた者を救う主」：敵から救ってもらったことについての個人的感謝の歌です。表題にある「ムトラベン」というものが何なのかは、はっきり分かっていません。オーボエやハーブに合わせてという意味ではないかとも言われています。
- ・ユダヤの人々はこのダビデの個人的な感謝の詩を歌いながら、自分たちの経験を重ね合わせていきます。彼らイスラエル民族には、苦い思い出がありました。それはバビロン捕囚という、列王記下24章にある出来事です。
- ・その苦難の中から救われた喜びを、この詩では歌っています。わたしたちにはよその国に無理やり連れて行かれるという経験はないかもしれませんが。しかし暗闇の中に光を与えられたことはあるでしょう。そのときにこそ、この詩のように神さまに感謝したいものです。

(1月17日)「詩編9:12~15」

おとめシオンの城門で あなたの賛美をひとつひとつ物語り 御救いに喜び躍ることができますように。

(詩編9編15節)

- ・「おとめシオン」という言葉がでできます。奈良基督教会には「シオンホール」という建物があり、また教会の広報誌には「シオンの丘」という名前がつけられています。「シオン」はわたしたちにとっても、身近な名前です。
- ・「シオン」というのは、エルサレムのことです。「喜べや たたえよや シオンの娘 主の民よ」という歌にも出てくるシオンは、エルサレムの詩的名称です。「心の清い者」という意味もあるようです。
- ・わたしたちにとって、シオンとはどこでしょうか。エルサレムというとパレスチナにある場所が浮かびますが、シオンとは神さまがおられる「新しいエルサレム」なのかもしれません。わたしたちもそこに招かれ、主を賛美することができるのです。